

---

# 主人公じゃない主人公の物語

sisi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

主人公じゃない主人公の物語

### 【Nコード】

N2130Y

### 【作者名】

S i S i

### 【あらすじ】

西尾維新先生の作品の二次創作です。基本はめだかボックスですが戯言、化物語の世界観なども共有する予定です。ただ作者は初心者なので年齢などつじつまが合わないなどのことが起きると思いますがそこはめだかボックスの世界に似た世界ということでご容赦下さい

## プロローグ（前書き）

初心者ですのでダメな所が多々あるでしょう。で色々感想なので教えて下さい。

ただ、作者は心が弱いのであまりキツくいうのは辞めて下さい。

## プロローグ

真っ白な空間にいつのまにか僕はいた。

そして、周りには、他にも何人か僕と同じで状況が分かってなさそうなひとがいるなかでここが何処だか知ってそうな人もいる。

そして、僕達の目の前には黒髪で美人といっても遜色がない女性がいた。

そして、彼女が僕達に話しかけてきた。

「やあ、君達初めまして」

「僕の名前は安心院なじみだ」

「親しみをこめて安心院さんと呼びなさい」

「くれぐれも安心院と言わないでくれよ」

「そう呼ぶのは敵だけだからね」

「あと、名前もやめて欲しいな。」

「名前は彼等だけに読んで欲しいし…。」

「まあ、それは置いといて今回見て欲しいのはある男の子の物語なんだ」

「彼の人生はとても波乱万丈だ」

「しかし、彼はとても強かった」

「いや、腕つぶしのことじゃあないよ」

「彼も弱くはないけど僕には勿論、彼の周りにいる子達よりも実力は下だしね。」

「まあ、実力は…だけどね」

「彼が強いのはね、心なんだ…。」

「彼の周りにいる子達も多かれ少なかれ彼のそんな強い心に助けられた子がほとんどだ」

「まあ、僕もそんな彼に助けられた内の一人なんだけどね」

「僕は前にね、ある子達のことを主人公と称したことがあるんだ」

「まあ、彼女達は否定しけどね、いや否定というよりも主人公よりもヒロインの方がいいと言ってただけか…。」

「全く彼女達には呆れたものだよ」

「彼はね、言うなれば主人公の親友なんだよ」

「彼の戦い方、考え方はほとんどが主人公じゃない」

「彼は自分の為なら何でもするし自分が好意的に思える人がなにをしても助けようとする」

「例えそれで、関係ない奴が死んでも気にしない。」

「だって、彼は自分が気に入ってる空間さえ守ればいいから。」

「例えば王道の漫画で魔王が勇者に世界の半分をやると言われたとするよ」

「王道の主人公なら断って仲間と一緒に傷つきながらも戦いうよね？」

「けれど、彼は違う。」

「仲間が傷つくぐらいなら彼は人を売る。仲間以外をね…。」

「もちろん、彼に無意味に人をいたぶって喜ぶ趣味はないから仲間じゃなくてもひどく扱わないだろうけどね」

「こんなことは主人公ならしないよね」

「ほかに例えるとしたら仲間か世界どっちを救うっていう話もあるよね」

「主人公なら迷いながらも両方救うを選ぶよね？」

「彼なら迷わず仲間を助ける。」

「そして、世界が滅んでも仲間たちだけは最低前助かるようにする」

「例え、それでほかの数十億もの人間が滅んでも彼は仲間を選ぶ」

「ふふっ、これだけ聞くと何か悪役みたいだね。」

「ほら、娘を救うために世界を巻き戻そうとする組織のボスとかいるじゃないか？」

「まるで、それだよね」

「まあ、言葉で説明するのは難しいからさ、さっき言ってたみたい  
に彼の人生をみてもらうよ」

「え、何のために見せるんだだって？」

「そんなの彼の良さを世界に広げるためじゃないか」

「彼はね、本当に素晴らしいんだよ。」

「僕は彼の為だったらなんだってするよ」

「まあ、彼にそんなこと言ったら呆れたり怒ったりするだろうけど  
ね」

「まあ、のろけっぱいのは止めにしよう」

「じゃあ、見せるよ」

「○○○○」

そうして僕は白い光につつまれた。

そして、目を開いたら見たのは小さい男の子だった。

## プロローグ（後書き）

どうだったでしょうか？次回は主人公を出して主人公の視点で行きたいと思います。

誤字、脱字有ったら教えて下さい。暇な時に直します。



俺、不幸すぎね？      b y 創（前書き）

二話目です…。

俺、不幸すぎね？ by 創

俺の名前は藤堂創。

小中高大一貫の御船中学校に通う中学2年生だ。

え、なんでそんな説明口調なんだって？

そんなの決まってるじゃないか。

俺のファースト幼馴染のがまたバカをやったから現実逃避してるんだ。

「すみません、すみません。ほら、ボーっとしてないで創も一緒に謝って」

目の前のおじいちゃんにすごい勢いで謝っているのは俺のセカンド幼馴染こと沼地瞳だ。

そして、瞳がなんか俺にも謝罪させようとさせてきたので現実逃避はやめて俺はとりあえず俺は全力でにげることになろうと思う。

「私は知らないから帰りますっ！」

ダッ

俺は全力疾走で走ったがそれに瞳がそれに気づき声を出した。

「あ、創！！何逃げてんのよ。なじみちよっと捕まえてきなさい！」

「やれやれ、ぼくかい？まったく人使いが荒いな。それに僕は基本的に創の味方なんだけどな…ボソッ。まあ、おもしろそうだからいか」

そう言い、なじみは中学生とは思えぬ速さで創のもとに追いついた。

「あっ、てめえ裏切りやがったななじみ！　というか、これ絶対逃げるの無理じゃねーか！」

追いかけてきてるのは安心院なじみという少女だ。

ある日、突然現れてすぐに俺達のグループに馴染んだ不思議な少女だ。

まあ、俺はなんで俺達の前に現れたかを知ってるんだが。

「無理だと思うなら諦めたらどうだい？　今なら瞳も軽いお仕置きで済ますと思うよ。」

なじみは呆れながらもそう言った。

「そうだよ！　今なら蹴り10発で許すよ！」

と、足で蹴る真似をしながら創に向かっていつているがその蹴りの速さは尋常ではなくさつきから蹴るたびに風がビュンビュンといっている

「諦めたらそこで試合終了なんだよ！　安○先生も言ってたぜ！　というか、蹴り10発が軽いってどういうことだよ！　お前の蹴りは普通の奴なら一発で気絶するレベルじゃねーか！」

「そ、そんなことないわよ。なじみには全然通じないしほかにも阿良々木くんとかにもあたらないわよ！」

「なじみは化け物だから別だから！　そして空牙も結構な人外だからね！　あと、あの空牙でさえその蹴りにはあたりたくないともいって

るからね!」

瞳が言った阿良々木空牙とは俺達の友達の一人で身体能力がバカみたいに高く軽い正義バカでもある。

まあ、ちゃんと必要悪もわかってるからいいんだけど暇な時には自分の正義を語るといふ少し変わった人物だ。正直少しうっとうしい。というか、俺はなんでこんなに説明口調なんだ……。なんだ、神が俺達のことを説明しろっていつてるのか? まあ、このままでもいいか。

「なによそれ! それじゃあ私がまるでゴリラみたいじゃない「いや、そこまで言っていないよねえ!」。いいわ、わかったわもう謝っても遅いんだからね絶対気絶するまでできるんだから! なじみ、やっちゃいなさい!」

「ぼくは君の使い魔かい? というか創、ぼくも君のぼくが化け物と言った件について聞きたいんだが」

「そこ! ? いや、だっておかしいだろ! 20メートルぐらい離れてたのを一瞬で追いつき目の前に立ち塞がるなんてよ」

「バカねえ、何言ってるの?」

「そうだよ。何を言っているんだい?」

「え、なにこれ? 俺がおかしいの! おい! というか元凶は? 俺をこんなに状況にさせた元凶は?」

「さっき、瞳に蹴られてそこに転がっているよ」

そこには180ぐらいの大きな男の子が転がっている

「本当だ！なんで気付かなかったんだ」

全く気付かなかったな…。全く、流石隆夜だぜ！

人吉隆夜、俺をこんな状況に陥れた俺のファーストと幼なじみだ。名字の通り人は良いんだが悪ノリしやすい人物だ。あと、中学2生の癖に背が高い。本当に高い。20センチぐらいくればいいのに…。

「そんなことより創。「そんなこと！？」そんなことだよ。」

えー、なにあいつ…。隆夜が目当てなんじゃねーの？

「また、何か失礼なこと考えてないかい？」

「心を読むなよ…。」

相変わらずチートだなあ、なじみは。

「読んでないさ。君の考えてることならだいたい分かる「キャッ、やだ俺マニア？」さって君ねえ。はあ、まあいいや何か言い残すことはあるかい？」

「は、言い残すことって？」

周りを見てみたら瞳が笑顔で相変わらずチートだなあ、なじみは。

「読んでないさ。君の考えてることならだいたい分かる「キャッ、

やだ俺マニア？」さって君ねえ。はあ、まあいいや何か言い残すことはあるかい？」

「は、言い残すことって？」

周りを見てみたら瞳が笑顔で俺の前に立っていた。

「状況は分かったみたいね。で、言い残す言葉は？」

「えー、と。じゃあ、例えば俺を殺しても第2第3のお前を倒すだろう…みたいな☆」

「そっかあ、じゃあイツペンシンデミル？」

そう言って瞳は俺を蹴った。意識が有ったのは5発目までだった。最後に聞いたのはなじみの「今のは僕でも軽く引くよ」という声だった。

所変わって瞳が謝っていたおじさんには瞳が居なくなったので一人の少年がおじいちゃんに謝っていた。

「騒がしくてすいません。あとで彼らにも言うておきますので」

と少年が深々と申し訳なさそうに頭を下げた。

「いや、別にいいですよ。それに、最初から怒ってもないですよ」

老人は手を振り怒ってないことをアピールをした。

「そうですか……。ところで何があったんですか？ 後から来たのでよくわからなくて」

と、彼は不思議そうに聞いてきた。

「いや、たいしたことじゃあないですよ。それよりも楽しそうですね彼らは」

そう言い老人は瞳たちを懐かしそうにそして珍しそうに見た。

「ははっ、そうですね。」

少年も彼らを自分の子供たちを見るような目で見てた。

「君は年の割にはずいぶんと大人っぽいですね」

老人はおもしろそうに言う。

「ふふっ、そうですね。まあ、自分はまだまだ子供ですよ」

と少年は少し悲しそうに言った。

「何かあるようですね。まあ、私はもう帰りますが何かあったら箱

庭学園に来てください。私はそこで理事長をやっていますので」

「ありがとうございます。けど、たぶん大丈夫です。自分には彼ら  
がいますので」

少年は誇らしそうに言った。

「そうですか。ではもう行くので彼らのとこに行ってください」

「はい。どうもすみませんでした。それでは」

「はい、さようなら」

少年は急いで彼らのところに行き笑顔で瞳を止めに入った。

それをみて老人、不知火袴はおもしろそうにしていた。

「彼らはとてもおもしろいですね。少ししらべてみましょうか…。  
それに安心院さんがいたのもきになりますし…。」

老人、不知火袴はこれからのことを楽しそうに考えていた



**俺、不幸すぎね？ b y 創（後書き）**

主人公の名前は創と書いてはじめと呼びます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2130y/>

---

主人公じゃない主人公の物語

2011年11月8日09時06分発行